

まちの音と住民の想起する生活像に関する調査研究 - 岐阜県郡上八幡を対象として -

古川 日出雄 ※

HIDEO Furukawa

本研究では郡上市八幡町を対象とし、生活景に対する音からのアプローチを試みる。アンケート調査によって住民が認識しているまちの中の音とその意味および共有性を把握し、ヒアリング調査によってまちの音が表象する住民の生活や生活環境を明らかにする事を目的とした。その結果、住民は水関連の音、郡上踊りの音、秋葉様の鐘の音に対して心地よい、まちにとって大切であるといった意識をもっており、さらにそれらの音は、住民が自ら経験してきた、または経験している彼らの生活やその生活環境をよく表象しているという事が明らかになった。

Key Words : 生活景、郡上八幡、サウンドスケープ

1. 研究の背景と目的

1990 年代後半より人々の日常的な生活や生活環境を、「眺め」という媒体を通して捉えた「生活景」という概念の有する価値が見直されてきた。戦後以降、都市の画一的な発展により、多くの地域でアイデンティティーが確立できなくなってしまう今日の日本において、日常生活に密着した景観である生活景は、今後持続可能なまちづくりを進めていく上で非常に重要な概念であると言える。

しかし、私達は日常的な生活環境を視覚的な「眺め」だけで捉えているのではない。「音」という媒体に着目すると、音は特に日常生活と密着したものであると言える。その理由として、日本人はししおどしや水琴窟のような装置を開発し、音によって日常的な生活空間を彩り豊かにしてきたということや、1996 年に環境庁の選出した「残したい日本の音風景 100 選」¹⁾ では「青森のねぶた祭」、「川越の時の鐘」、「吉田川の川遊び」といったような住民の生活に密着した音も選出されているという事が挙げられる。これらの音以外にも人は生きていく上で様々な音によって包み込まれた環境で生活しており、人々の生活と音というものは非常に密接な関係にあると言える。

今回研究の対象とする郡上市八幡町(以下八幡)には集住地に水網が張り巡らされている。その水を多面的に利用するシステムが住民によって代々受け継がれており、郡上踊り等の祭事や歴史的なまち並みと相俟って八幡独自の生活景が形成されている。このような良好な生活景を有する八幡で、まちの音に関する研究を行うことは、生活景をきっかけとしたまちづくりに対する音の側面からの新たな知見が得られるということ、また、未だ漠然とした概念である生活景を音との関係からとらえることができるということ、この 2 つの点から意義のあるものであると考えられる。このような将来的な目標をふまえ、本研究では八幡の生活景を支えている住民が彼らのまちのどのような音にどのような意味を感じ、それを共有しているかを明らかにする事と、音が表象する住民の生活や生活環境を明らかにする事を目的とする。

2. 研究の概要

2.1 概念の整理

生活景とは「人間をとりまく生活環境の眺め」²⁾と定義される。ここで意味する生活環境とは地域風土や伝統に依拠した生活を通じて生み出されたものであり、単なる「眺め」だけでなく、このような背景まで包含している概念であるという事に生活景の重要な意味がある。一方で、生活景は生活環境を主体が捉える際に、「眺め」という一つの媒体を通して考えようとしたものであると言える。しかし、主体は環境を眺めだけでなく、音や香り、肌触りや温度感等の五感すべてを通して捉えるので、「眺め」という一側面からのアプローチだけで生活環境やその背景を議論するには限界がある。そこで五感のなかでも生活と密接な関わりのある「音」という媒体に着目すると、音の側面から主体が環境をどのようにとらえているかを扱う分野に「サウンドスケープ」という分野がある。サウンドスケープとは、カナダの作曲家 R.Murray Schafer によって提唱された「サウンド」と「~の眺め/景」を意味する接尾語「スケープ」の複合語であり、個人あるいは社会がどのように知覚し、理解しているかに強調点の置かれた音の環境を意味する³⁾。このサウンドスケープ研究の手法を用いて、音の側面からも総体的に生活環境についてアプローチすることで生活景が議論しようとしている一般の人々の日常的な景観や、その背後の生活や社会、コミュニティ、文化に対する深い知見が得られると考えられる。

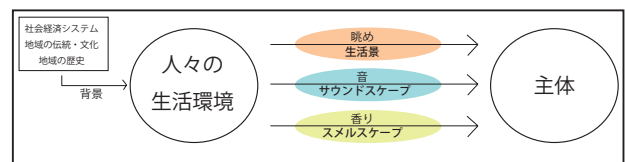


図 2.1 アプローチの概念図

2.2 既存研究の整理

生活景に関する研究としては、吉丸らによる生活景の捉え方、景観の特徴を既存の研究や論考を整理することで明らかにし、その上で社会実験を通して生活景の価値、景観施策展開への活用の可能性を検討した研究⁴⁾、野崎らによる尾道市の居住者が生活景に対してどのような印

象をもち、現在と過去の生活景をどのような知覚でとらえているのかを明らかにした一連の研究^{5), 6), 7)}がある。

また、サウンドスケープに関する研究としては、まちづくりと関連させているものでは、土田らによる金沢市東山周辺地域を対象として、まちの音が地域の住民にとってアイデンティティとしての価値を持っているとし、音の重要性を提言している研究⁸⁾、小松による住民は音を物理的な量で評価しているのではないことを明らかにし、漁業を継承することが地域の音環境保全・育成につながるとし、住民の生活知識を活かした地域保全計画を行うことの重要性を提言している研究⁹⁾がある。

生活景と音の関係性について注目はされているが、具体的に音の観点から生活景に対してアプローチした研究は未だ無い。

2.3 研究の方法

本研究では、まず主観的音種調査によって、現在の八幡にはどのような音が存在するのかを把握し、住民が日々どのような音にどのような意味を感じそれを共有しているかをアンケートによって調査する。そしてアンケート結果から明らかになった八幡のサウンドスケープを特徴づけている音について、それらの音から住民がどのような風景や記憶、思い出を連想するかを調査し、音が表象する八幡での生活やその生活環境をヒアリング調査によって把握する。

3. 研究の対象地域概要

3.1 概要

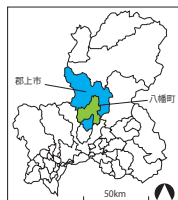


図 3.1 郡上市位置

対象地である郡上市八幡町は岐阜県のほぼ中央に位置し、平成 20 年 10 月 1 日現在で人口 15,535 人、面積 242.31 km²である。古くから地形的に東海地方と北陸地方を結ぶ、交通の要衝である。1559 年東殿山の戦いで東氏を滅ぼした遠藤盛数が八幡山に城を築き、その城下町として郡上八幡がつくられた。現在は「水と踊りの城下町」として年間 140 万人が訪れる大観光地である。

3.2 郡上踊り

郡上踊りは 400 余年の伝統を誇る日本三大民踊の一つで、国の重要無形民俗文化財に指定されている。毎年 7 月中旬から 9 月上旬にかけて 32 夜にわたって踊られ、クライマックスの 8 月 13,14,15,16 日は徹夜で踊る。

3.3 水利用施設



図 3.2 乙姫川での洗濯風景

八幡町には地形を巧みに活かし、集住地に水網を張り巡らせ水を多面的に利用するシステムがある。これは 1652 年の大火をきっかけに築かれた。そして、昭和 48 年からの渡部らの調査により、「水縁空間」と定

義されるように水辺空間が人々の交流の媒体となり、独特の共同体認識が育まれていることが明らかにされ¹⁰⁾、その後、環境省によって宗祇水が「名水 100 選」に選ばれ八幡の水利用施設は注目された。まちの中には水路や水舟、カワドと呼ばれる水利用システムが今でも大切に受け継がれている。

4. 現在と過去における八幡の音風景について

4.1 主観的音種調査

(1) 調査の概要

現在の八幡にはどのような音種が存在するのかを把握するため、主観的音種調査を行った。調査の概要を図 4.1～図 4.5、表 4.1 に示す。

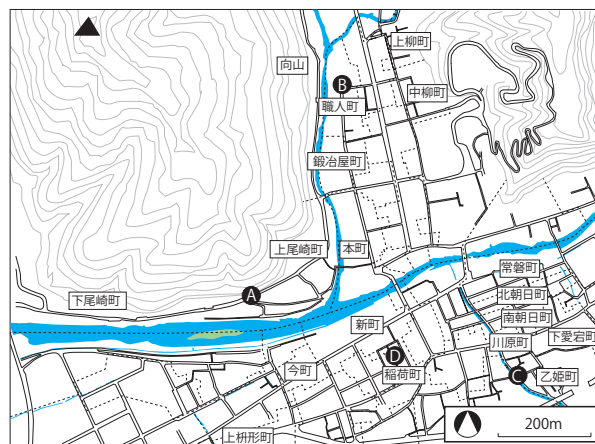


図 4.1 地区名と調査地点

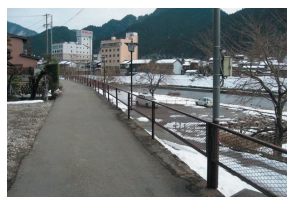


図 4.2 上尾崎町 (地点 A)



図 4.3 職人町 (地点 B)

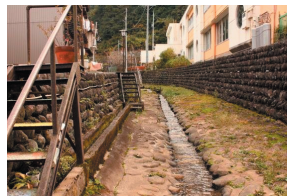


図 4.4 乙姫町 (地点 C)



図 4.5 稲荷町 (地点 D)

表 4.1 調査の概要

日時	2010 年 1 月 11 日 (月)
場所	上尾崎町 (地点 A)、職人町 (地点 B)、乙姫町 (地点 C)、稲荷町 (地点 D)
内容	地点 A、B、C、D それぞれにおいて、朝 (9 時～11 時)、昼 (12 時～17 時)、夜 (19 時～24 時) の 3 回にわたり 20 分間、観察者が主観的に聞こえた音とその頻度を記録する。

(2) 調査の結果

上尾崎町 (地点 A) の結果を一例として表 4.2～表 4.4 に示す。上尾崎町は吉田川と山に挟まれた地区であるということと、観光客の為でない、山の水を引いた昔からの水舟が今でも多く残っていることから、どの時間帯でも「吉田川のせせらぎ」、「水舟の音」が持続的に聞こえ

たこと、また「小鳥の鳴く声」が朝と昼によく聞こえることが特徴的である。

表 4.2 調査結果（朝）

音種	頻度（回）
吉田川のせせらぎ	持続音
水舟の音	持続音
車の走行音	22
小鳥の鳴く声	20
カラスの鳴く声	7
犬の吠える声	4
外で人の話す声	3
虫の声	1
目覚まし時計の音	1
人の足音	1
雪が屋根から落ちる音	1
飛行機の音	1
車のドアの開閉音	1
ヘリコプターの音	1
人が雪を踏む音	1

今回は上記の4地区で朝、昼、夜の三つの時点における調査を行った。その結果、4地区それぞれに特徴のある音種が観測できた。さらに同じ地区内では3つの時点で観測できる音が様々である事、夜は音種の数とそれぞれの音種がきこえる頻度も少ないことから、非常に静かであるということがわかる。

4.2 アンケート調査

（1）調査の概要

住民がまちの中のどのような音にどんな意味を感じ、それを共有しているかを明らかにするため、住民を対象としたアンケート調査を行った。調査概要、回答者の属性、調査内容については表 4.5、表 4.6、表 4.7 に示す。

表 4.5 調査概要

配布期間	2009 年 11 月 8 日（日）	配布形式	ポスティング
配布地区	16 地区（下尾崎町、上尾崎町、向山、職人町、鍛冶町、本町、上柳町、中柳町、常盤町、北朝日町、南朝日町、川原町、乙姫町、新町、稲荷町、今町）		
回答数／配布数（回収率）		132／610(21.6%)	

表 4.6 回答者の属性

性別（人）	男性（62）、女性（58）
年齢（人）	10 代（1）、20 代（3）、30 代（4）、40 代（12）、50 代（17）、60 代（36）、70 代（41）、80 代（8）、無回答（5）
居住歴（人）	1 年未満（0）、1～5 年（2）、6～10 年（2）、11～20 年（7）、21～30 年（16）、31 年以上（95）、無回答（5）

表 4.7 アンケート内容

Q.1	心地良い音はなんですか。またなぜそう思われるのですか。
Q.2	不快な音はなんですか。またなぜそう思われるのですか。
Q.3	このまちならではの象徴的な音はなんですか。
Q.4	新しく入ってきた音、または増えた音はありますか。それは何の音でいつ頃からですか。
Q.5	無くなった音、または減った音はありますか。それは何の音でいつ頃からですか。
Q.6	懐かしい音はなんですか。またその音にまつわる思い出がありましたら教えてください。
Q.7	八幡のまちにとって大切な音はなんでしょうか。また、なぜそう思われるのですか。
Q.8	回答者属性

（2）調査の結果

①心地よい音について

集計結果を図 4.6 に示す。伝統的な文化である川や水路、郡上踊りの音はやはり多く想起された。また、八幡は自然が豊かであるため、鳥の鳴き声や虫の鳴き声も多

く想起された。しかし、最も多く想起された音は「秋葉様の鐘の音」で、朝 6 時、夕方 6 時（冬期は 5 時）に必ず鳴る寺の鐘の音である。この音は観光客にはわからない住民ならではの回答である。「どんなときの」という質問に対しては、「朝起きた時の」「夜眠る時の」「静かなときの」という回答が非常に多く、八幡独特の「静けさ」があつてこそ、住民は音を心地よいと感じると言える。

②不快な音について

「自動車の音」を含む交通関連の音が多く想起された。朝、夜と非常に静かな町であるため日中の人々の活動時間に聞かれる交通関連の音が、より不快であると感じると考えられる。次に多く挙げられた観光関連の音は観光客のマナーの悪さとともに記述される事が多かった。また、観光客の騒ぐ声が不快であると回答した約 40% が職人町の住民であつた。職人町の歴史的街並は八幡の観光スポットとなっているのだが、観光が住民の生活に悪影響を及ぼしている面もあるということが言える。

③象徴的な音について

心地よい音とほぼ同一の結果となった。しかし、注目すべきは「川で子供の遊ぶ声」や踊り関連の音が想起される割合が高くなったということである。「水と踊りのまち」といったキャッチフレーズや「残したい音風景 100 選」の影響が住民にもしみついていると推測できる。

④懐かしい音、増えた音、減った音について

集計結果と後に解説するヒアリング調査の結果から作成した音の変遷図を表 4.8 に示す。増えた音では観光客の声が 5、6 年前より増えたという回答が多く、また懐かしい音、減った音については豆腐屋、金魚売り等の物売りの音が幼い頃の思い出とともに多く指摘された。

⑤大切な音について

集計結果を図 4.7 に示す。概ね「心地よい音」、「象徴的な音」と同じような回答が得られた。しかし、水関連の音でいうならば、心地よい音や象徴的な音の場合に上位にあつた、「吉田川の音」や「水路の音」のような特定の要素ではなく、「川のせせらぎ」（住民の中には水路を川と呼ぶ人もいる）や「水の音」（水利用施設すべての音を意味すると考えられる）といった音を総体的にとらえた要素が多く想起された。この事から、「八幡のまち」と「水」という大きな概念との強い結びつきが感じられる。また、秋葉様の鐘の音については居住年数で比較すると、居住年数 31 年未満では 30 人中 3 人しか想起しなかったが居住年数 31 年以上では 76 人中 25 人が想起した。つまり秋葉様の鐘の音は居住年数が増すに連れてその重要さを理解する音であると言える。

（3）KJ 法による住民の意識構造の把握

「心地よい音」と「大切な音」についてなぜ住民がそのように感じるのかを把握するため、アンケートにおける理由を回答する自由記述部分を KJ 法によって整理した。結果を表 4.9 と表 4.10 に示す。

①心地よい音について

「心地よい音」について一つずつ順に考察する。特徴的な事は水の音を「日常生活の一部」としてとらえているため心地よいと感じている住民が一番多いという事である。水の音を心地よいと感じる理由に幼い頃から馴染んだ音で、日常生活の一部となっているからと回答するのは八幡の住民ならではであると言える。次に秋葉様の鐘の音については水の音同様、幼い頃から聞き続けていたから心地よいととらえる傾向と、同じく日常生活と深い関わりをもち、「一日の始まりと終わりを自覚する」といった「時の鐘」として認識されているため心地よいと感じる傾向がある。また、郡上踊りの音については自分が若い頃、踊りに行った記憶と深く結びついており、その音を聞きながら当時の事を思いめぐらせ、心地よいと感じていると考えられる。最後に自然の音についてであるが、この音に関しては虫の声で季節を感じたり、鳥の声で和みや安らぎを感じ、心地よいと認識しているという一般的な結果になった。

②大切な音について

次に「大切な音」についてである。水関連の音については、「まちのあちこちできれいな水のながれる水路があるまちはなかなかないことから大切にしたい」というように地域のアイデンティティーとして大切にしたいという傾向や観光的観点から大切にしたいという傾向がみられる。また郡上踊りの音は「無形文化財として後世につたえていきたい」という回答に代表されるように、まちの財産として大切にしたいと認識されており、これら2つの音は八幡のまちとして大切にしたいと認識されている傾向が強い。しかし秋葉様の鐘の音は「風情があり、気持ちがいい」といった回答に代表されるように「やすらぎ」や「和み」を日々の中で感じさせてくれる音として認識されていることや「八幡に住んでから聞き続けているから」や「一日のけじめのようなものだから」といった回答に代表されるように日常生活の一部であり、その音が個人の生活に直接影響をおよぼすものだから大切にしたいと認識されていることがわかった。

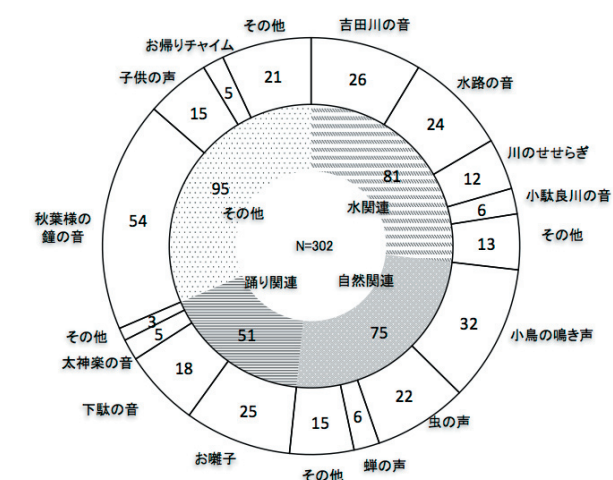


図 4.6 心地よい音 (人)

(4) 考察

アンケート結果より住民は水関連の音（水路や吉田川の音）、踊り関連の音（お囃子や下駄の音）、秋葉様の鐘の音といった、日常生活の一部となっていたり、幼い頃から馴染んだ音を特に心地よいと感じ、それらをまちの象徴的な音として捉え、まちの財産として、また個人の一日の生活に好影響を与えているために大切にしたいと捉えている事が明らかになった。そして、これらの音は住民に特に注意されており、八幡のサウンドスケープを特徴づけていると言える。

5. 音が表象する生活や生活環境について

5.1 ヒアリング調査概要

アンケート調査の結果より、八幡のサウンドスケープを特徴づける音として水関連の音、郡上踊りの音、秋葉様の鐘の音が抽出された。ここではそれらの音が住民のどのような生活や生活環境を表象するのかを明らかにするため、面接方式のヒアリング調査を行う。調査の概要を表 5.1、表 5.2 に示す。

表 5.1 ヒアリング調査概要

日時	2010 年 1 月 11 日 (月) ~ 1 月 13 日 (水)
対象	八幡町に住む 60 代 ~ 80 代の住民 9 名
方法	事前に連絡した上、自宅訪問による面接方式
内容	水関連の音 (吉田川の音、水舟の音、水路の音)、郡上踊りのお囃子の音、秋葉様の鐘の音を調査者が録音した音声を流し、それぞれからイメージされる風景や記憶、思い出を語ってもらい、記録した。また、随時、アンケートでは捉えきれなかった音の歴史やまちの音に対する印象を聞いた。

表 5.2 対象者概要

	年齢	居住歴	職業	地区名
A	73 歳	30 年以上	無職	川原町
B	81 歳	30 年以上	無職	上枳形町
C	61 歳	30 年以上	自営業	上枳形町
D	70 歳	30 年以上	自営業	上枳形町
E	75 歳	30 年以上	無職	下愛宕町
F	66 歳	30 年以上	大工	職人町
G	85 歳	30 年以上	無職	鍛冶屋町
H	78 歳	30 年以上	無職	稲荷町
I	81 歳	30 年以上	無職	上枳形町

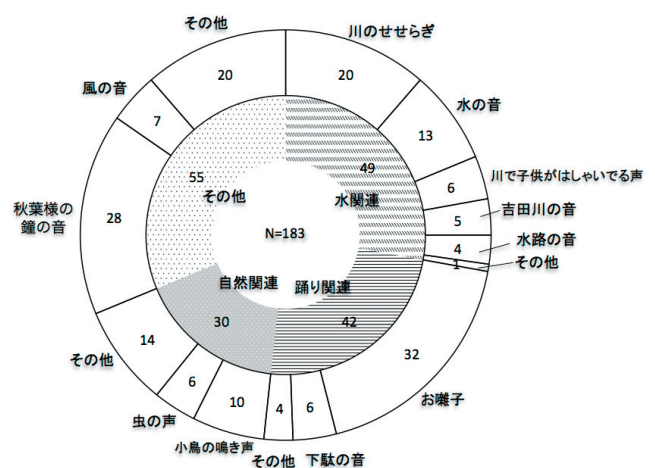


図 4.7 大切な音 (人)

5.2 調査結果

得られた回答の例を表 5.3 に示す。

5.3 考察

ヒアリング調査の考察を述べる。水関連の音は現在の生活ではなく、吉田川や水利用施設と生活の中で深く関わっていた過去の生活やその生活環境が想起された。郡上踊りの音からも自らが踊りに行っていた頃のその様

子が想起された。このようにこれら 2 種類の音は過去の生活やその生活環境を表象した。現在の音を流して、過去のことを想起するというのは住民の生活や生活環境は以前と比べて変化した、音はそれらほど顕著には変化していない事を意味していると考えられる。そして、生活の変化に伴い日常の中でその音と関わるのが少なくなったため、その音と非常に密接に関わっていた頃の生

表 4.8 音の変遷図

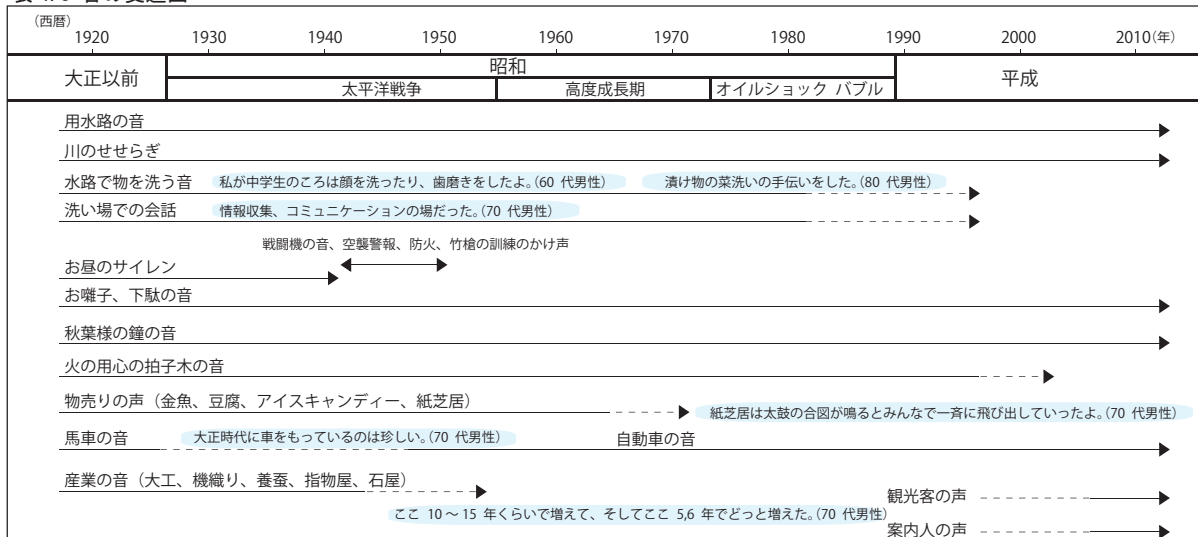


表 4.9 KJ 法による住民の意識構造 (心地よい音)

■水関連の音	■秋葉様の鐘の音	■郡上踊りの音	■自然の音
●日常生活の一部 46.4% ☆日常 44.6% ・子供の頃から音だから ・毎日聞いている音でなじんでいる ・幼いときから生活用水としてなじみできたから ☆生活のリズム 1.8% ・新聞配達のため、朝 4 時には起き、出発するため ●感情 41.1% ☆安らぎ・和み 35.7% ・心が洗われる。英気が養われる ・澄んだ音で心が休まる ・騒がしい世の中に心が落ち着く。 ☆郷愁 5.4% ・子供の頃の川で泳いだことを思い出す ・川を眺めるたびに子供頃 (高校生まで) 川でばしゃばしゃと泳いだり石を投げた遊んだ事が昨日のように思い出され、つい立ち止まってしまう ●まちらしさ 1.8% ・この町に住んでいる事が誇れる ●季節 1.8% ・水の色、増水時の濁りや、散歩時に思う四季の色違いで時節を感じる。 ●自然の豊かさ 1.8% ・自然の豊かさ、清らかさ	●日常生活の一部 62.5% ☆日常 29.2% ・生まれたときからの音だからなじんでいる ・聞き慣れた音で昔も今も変わらないから ・当たり前のよう毎日聞いている音だから ☆生活のリズム 33.3% ・一日の始まりと終わりを自覚する ・一日の初めの合図。聞き終わると布団から出られる ・一日が終わったと思う。一日のけじめがついたと思う。 ●感情 29.2% ☆安らぎ・和み 27.1% ・鐘の音で安心感、情緒がある ・これから始まる一日が平穏で無事である事を念じてくれているようだから ☆郷愁 2.1% ・一日の出発を助ますような音ででありその余韻が懐かしい ●まちらしさ 6.3% ・郡上の城下町にマッチしている ・時刻を知る以外に八幡にいる事を強く感じる ・毎日聞いているのですが山、川の景色にぴったりあって心地よい	●日常生活の一部 21.8% ☆日常 ・若い頃お盆になると踊ったので音に身にしみている ・こどものころからなじんでいる ・当たり前のよう耳にしている ●季節 25.0% ・夏がきたと感じる。街がにぎやかになるなと感じる ・小さい音でも山にこだまて聞こえてくると「夏だな〜」と思う ●感情 43.8% ☆安らぎ・和み 12.5% ・近くよりも遠くからかすかに聞こえてくる踊りや下駄の音で眠りを誘い心地よい ・夏の夜遠くから聞こえてくる祭囃子の音は格別 ・踊り手の下駄の音がそろったとき、遠くで聞こえるとき風情を感じる ☆郷愁 18.8% ・若い頃下駄をはいてよく踊った事を思い出す ・古き良き日本を感じる ・聞いている間に寝入ってしまう懐かしい音である。 ☆楽しさ 12.5% ・踊りが無い日でも下駄の音を聞くと心はやる気持ちになる ・いろんな人が仲良く踊っている感じが好き	●日常生活の一部 5.7% ☆日常 ・小さい頃から身近な山で聞いていたから ・小さい頃から夏になるとき聞いていた音だから ●季節 37.1% ・季節感を感じる ・静かなあ、秋だなあと思う ・虫の音を聞いて秋の訪れを感じる ●感情 48.6% ☆安らぎ・和み 34.3% ・生きていると思うし、心が安らぐ ・鈴虫のきれいな音で和む ・平和な安らぎを感じる ☆郷愁 8.6% ・夜中に目を覚ましたとき、しんと降り積もる雪の音や、鹿の鳴き声を聞き、幼少時代を思い出す ・聞いている間に寝入ってしまう懐かしい音である。 ☆元氣 5.7% ・今日も一日頑張ろうという気持ちになる ●自然の豊かさ 8.6% ・可愛らしさ、生命力、自然の豊かさを感じる ・自然の中にいるんだを感じる

表 4.10 KJ 法による住民の意識構造 (大切な音)

■水関連の音	■秋葉様の鐘の音	■郡上踊り関連の音
●アイデンティティ 44.7% ☆郷土らしさ 19.1% ・こんな町があることに誇りた水の流れる水路がある町はなかなかないところからこれを大切にしたい ・いたるところに水路や舟屋など水に触れるものがある。そういう町は日本に数少ない ☆誇り・自慢 6.4% ・八幡は山に挟まれ真ん中に川が流れているという風景はかわらなくましてやがきれいなという自慢できるまちだから。どこにいても水の音が聞こえる。 ●まちの財産 6.4% ・美しい、歴史がある。 ・無くなった元にもどるのに大変な時間や労力がかかる。郡上の文化であるから ●日常生活の一部 12.8% ・幼い頃から慣れ親しんだ音や声である。 ・水はこの町の人にとっては切れない存在 ・何十年も変わる事なく子供の頃より聞き育ったため ●自然の豊かさ 14.9% ・川の音、水の音は自然の豊かさを感じる。 ・自然と一体となった住まいと文化のある街が好きだから大切にしたい。 ・いつまでも自然を大切に住民の暮らしを保障するために。	●アイデンティティ 25.0% ☆郷土らしさ 25% ・町にある ・あまり他のまちには無いようなので大切にしたい ・鐘の音は郡上の象徴として当たり前のようかんじて ●まちの財産 12.5% ・また昔から続けられている歴史を感じる ・100 年以上続いた八幡の文化であり ●日常生活の一部 37.5% ☆日常 16.7% ・何十年も変わる事なく子供の頃より聞き育ったため ・八幡に住んでから聞き続けているから ☆生活のリズム 20.8% ・一日の生活の区切りになる ・昔からの音で、時間がわかる。 ●心理的好影響 41.7% ☆安らぎ・和み 37.5% ・秋などは特に心に響く音。朝は元気がでる。 ・風情があり、鐘の音は気持ちを静めるような気がする。 ・生きる喜びを感じる、平和な響きがある ☆郷愁 4.2% ・子供の頃に聞いた音は大人になっても懐かしく感じられ、情緒豊かになると思う	●アイデンティティ 15.1% ☆郷土らしさ 12.1% ・八幡はなんと言っても郡上踊り無しでは語れない ・田舎町であり、城下町である古い町の名残としてふるさととしてあってほしい音だと思ふ。 ☆誇り・自慢 3.0% ・八幡の踊りの音は八幡ならではの音であり財産。 ●まちの財産 30.3% ・日本三大民謡の一つなので大切にしていきたい ・無形文化財としていつまでも後世に残していきたい ●心理的好影響 27.3% ☆安らぎ・和み 3.0% ・心癒やりにしてくれる ☆郷愁 9.1% ・音懐かしい音を聞く事に心がほぐれることがあり、幸せを感じる ☆楽しさ 15.2% ・踊りをすればどんな人も幸せそう顔になる ●観光 15.2% ☆観光 PR 15.2% ・大切な観光資源だから ●日常生活の一部 12.1% ☆日常 12.1% ・子供の頃から身に染み付いているから ●季節感 12.1% ・夏が来たと思う

活を現在の音から想起したのである。生活や生活環境が変化したとはいえ、それらが急激な変化をとげていれば、その生活や生活環境にまつわる音も急激な変化を遂げているはずで、現在の音を流しても住民は何も想起しないと考えられる。つまりこの結果より八幡での生活や生活環境は急激な変化はしていないということが言える。

一方、秋葉様の鐘の音は現在の八幡の住民の生活の様子を表象している。これは、現在の音が現在の住民の生活と非常に密接な関係にあるという事を示し、音そのものが住民に時の鐘としてのある効果をもたらしているということを示している。

以上より、まちの中の音は現在、過去を問わず、住民の人生において最もその音と密接に関わっているまたは関わっていた頃の生活や生活環境を表象するという事が明らかになった。

6. 結論

アンケート調査、ヒアリング調査を通じて、本研究では住民が八幡のどのような音にどのような事を感じ、それを共有しているかが明らかになり、またいくつかの音についてはその音が表象する住民の生活や生活環境を把握する事ができた。最後に今回の研究を通して、次の2つのことが言える。

○生活環境に対して音の観点から調査を進める方法論についての示唆

まず、利点については音からのアプローチでなければ把握する事のできない住民の生活や生活環境を抽出することができるという事が挙げられる。例えば、「秋葉様の鐘の音」が日常生活の一部、生活のリズムを生むものとして八幡の住民の生活に欠かせない存在となっているという事実は音からのアプローチでなければ抽出されないであろう。しかし、音は聞く場所、時間、場面によって人が受ける印象や意味が大きく異なる。本研究においても録音した音を再生しその音から住民が連想する思い出や記憶を調査したのだが、幼い頃よく遊んでいたはずの吉田川の音を再生しても「聞いた事のない音」、「経験してきた音とは異なる」という理由で何も連想されない

という事があった。同じ吉田川の音でも川岸の音と川の中の音、川の流れが速い場所、遅い場所等、多種多様であるし、また、その録音機器の性能の問題もある。音は写真と比べて再現性に劣るため、ある音を録音し、その印象を評価するような際には注意が必要となる。

○音の調査によって明らかになった八幡の特質と八幡への示唆

住民はそれぞれ自らの音の歴史をもっており、多くの住民が水関連の音と郡上踊りの音、秋葉様の鐘の音に対し、心地よいと感じていたり、大切にしたいと捉えているように、まちの音に対する共通の認識があるということが明らかになった。これらの音は八幡のアイデンティティとなっていると考えられる。特に水路の音に関してはヒアリングの中で「以前の石組みの頃と現在のコンクリートの U 字溝では音の響きや水路の音に対する印象が異なる」ということが挙げられたことから、今後「水のまち」としてのまちづくりを考えていく際に、ただ水が流れていることに価値を見いだすのではなく、その素材や形状についても検討し直していくべきである。

今後の課題としては、本研究の成果と生活景をどのように関係づけていくかということである。

<参考文献>

- 1) 感覚環境の街作り報告書、環境省、2006.12
- 2) 生活景、社団法人日本建築学会、学芸出版社、2009.3.30
- 3) サウンドスケープ-その思想と実践-、鳥越けい子、奥村印刷、1997.3.25
- 4) 生活景の捉え方と一般市街地における景観施策への活用に関する考察、吉丸俊和・柴田久・石橋知也、景観・デザイン研究講演集 No.3、2007.12
- 5) 尾道市の斜面街区における現在と過去的生活景と感覚の問題、野崎俊佑・千代章一郎、日本建築学会近畿支部研究報告集、2006
- 6) 尾道市の斜面街区における現在と過去的生活景の問題、野崎俊佑・千代章一郎、日本建築学会大会学術講演梗概集、2004.8
- 7) 尾道市の斜面街区における生活景の形成、野崎俊佑・千代章一郎、日本建築学会中国支部研究報告集、2006.3
- 8) 金沢市東山周辺地域の音風景に対する住民の意識構造、土田義郎・稲橋和彦・宮野祐、サウンドスケープ9巻、2007
- 9) 漁村におけるサウンドスケープ研究-丹後・伊根浦を例として-、小松正史、日本音響学会音楽音響研究会、1995.2
- 10) 水縁空間、渡部一二・郭中端・堀込憲二、星雲社、1993.8.25
- 11) 郡上八幡町史 上巻・下巻、武藤互朗、平和印刷、1961.1.20

表 5.3 ヒアリング調査の回答例 ※アルファベットは表 5.2 に対応する。

■吉田川の音
A: ぱつと考えると、泳いで自分が流れに逆らわず泳いで、流れているように感じ E: 心の安らぎを感じる。子供の時の初めて川に行って泳いだ思い出。子供のときから過ごしてきた思い出を感じる。
■水舟の音
D: スイカを冷やすと旨い、トマト、きゅうりを冷やすとおいしいなあというイメージ。それと今みたいな「コトン」という音をきくと、先に一杯水を 飲みたいなあと感じる。
■水路の音
I: 母親が秋の終わりに野菜を小川で洗って、漬け物をつけなさった。それを冬の食料にした。菜洗い（漬け物につける野菜と洗う事）は季節の行事だったもの。洗うときに板を谷川に持っていったで足場をつくって座り込んで、その水で菜洗いをしたもんだよ。白菜、大根、かぶを山のように洗ってつけたんだよ。それを町屋では地下室の桶に入れて保存するんだよ、それを冬に出してくると氷が張ってあってね、カネコリといってね、それを炭火の網でジュジュジュと溶かすんだよ。それが冷たくておいしいんだよ、ご飯がすすむの。
■踊りの音
H: この音がなると近所から浴衣と下駄の人達が一齐に出ていってね。この音をきくとやっぱりそられる。浴衣来て、下駄を履いて、近所の子みんな誘って、みんなで踊ったなあ。
■秋葉様の鐘の音
D: 朝は今日一日はじまるなあ、はじまりの音として聞く。鐘の音が終わるまで耳をすます。ラジオが六時が知らせた後にならず。夕方は今日も一日無事に終わったかと思う。